



マルチ・エイリアスの錯綜

この建築は、過剰なまでのイメージを内包する。特徴的なカタチは設計者自身の記憶や、世界に存在するあらゆる形態群を参照している。この極私的イメージを起点とする形態の断片群を過剰に発散させ、ついには合成させる。そうすると、私のだったはずのイメージはその過剰な速度により誰かのイメージへと捻じ曲がってゆく。普遍的で豊富なカタチは誰かのイメージと、敷地を構成するエレメントと重なることを意図している。また、架構、設備、敷地周辺に内在するグリッド、シンメトリー、家型などの比例体系を拡大解釈し、同じくイメージとして取り込む。これらは合理的根拠に拠るが、建築に内在するイメージが敷地環境を越えて関連付く意図と重なっている。敷地は候補地を複数挙げ、それぞれの敷地への応答を並行してドライブすることで離れた場所にあるはずのものが相互作用し、建築の解釈をさらに広げることになる。複数の語り口を含んだ、幾つものイメージの重なりが、この建築の現れとなっている。



誰かの「帰りたい家」、人生の過渡期にいる人たちの、一時的な住居「ブラグイン・シェルター」を設ける。一時的に住居を探している人たちのための、一時的に社会から離脱し、精神を落ち着かせ、その後ならかな復帰を助けるための場所。様々な時間軸を行き来する現代人のための平行世界を用意する。それは完全なる別世界ではなく、現実の延長に存在するある可能性としての空間。浮遊しているイメージが現実世界との繋がりを留保することで、「逃避と接続の両義的欲求」は満たされる。

